

# 学問と地域文化の 創造をめざす大学改革

期待される愛知学長懇話会

## 対談

江原昭善（福山女学園大学学長）  
大沢 勝（日本福祉大学学長）

十八歳人口減少期を迎え、生き残り競争からも、各大学それぞれが魅力ある大学づくりのために様々な改革を進めています。その一方で、複数の大学が連携や共同を強める動きもみられます。「愛知学長懇話会」の発足もこうした動向と軌を一にするものです。この懇話会は、昨年四月愛知県内の大学院を持つ四年制の二十五大学の学長・理事長・学長経験者ら二十九人で発足し、九四年四月三十日に設立記念シンポジウムを開きました。

シンポジウムでは「二十一世紀の大学ビジョン」をテーマに、愛知・東海地域の文化振興に積極的な役割を担うこと

のできる新しい大学づくりの方向が熱心に話し合われました。また、懇話会は大学が抱える問題だけでなく、高校と大学の協力関係の強化や地域文化創造に関する提言を積極的にこなっていく計画をしています。そこで、本誌では、大学の連携をテーマとする本号の企画の一つとして、この学長懇話会の趣旨、そして愛知・東海の地における今後の大学づくりと大学連携の方向について、懇話会の江原昭善・大沢勝（懇話会事務局長）両学長に広い視野から語り合っていただくことにしました。（編集委員 三羽光彦）

## 学長懇のめざすもの

江原 愛知学長懇話会は、これは無理矢理につくったものではなく、できるだけしてできたものです。どうしてできたかという点については、大沢先生からお話いただきましょうか。

大沢 先日のシンポジウムでもその経過はお話ししましたが、まず、大学には今何が求められているか。大学の現在求められているものは何か、という点の切実な認識が基礎にあります。

その観点から考えると、第一に「大学の自己革新」とい



おさわ・まさる：1931年福岡県生まれ。専攻は教育法制度論、大学制度論。日本学術会議会員として活躍。現在、日本福祉大学の総合大学化創造に熱意を燃やしている。『日本の私立大学』などがある。

うことが不可欠です。大学をとりまく環境は大きく変化しています。よくいわれることですが、大学が学生を選ぶのではなく、学生が大学を選ぶ時代になったということです。すなわち、ご承知のように十八歳人口は減少しています。したがって大学も学生確保が切実な課題となってくるのは眼に見えています。しかし、他方では、高校卒業者に占める大学志願者の比率も上昇するでしょう。もうすでに、短大・専門学校を含めた高等教育の志願率は大幅に上昇し、その結果、文部省の予想試算とは異なり、高等教育進学者の比率はすでに五〇%を超えています。このように青年たちの大学教育へのニーズはかつてなく高まっています。同時にそのニーズは多様化しているといえるでしょうか、質的に変化してきていると思います。そうしたなかで、現代の青年たちのニーズにあわなければ、大学は社会のなかから取り残され、その存在が問われかねない状況となっています。こうした状況のなかで、個々の大学の努力ももちろん大切ですが、大学が共同して変わっていくという視点も大切ではないでしょうか。

第二には、国際的・国家的な規模での政治・経済・社会のシステムの質的な転換が進行していますが、それは、大学における教育と研究の方向転換に不可避の影響を与えて

います。世界的規模での環境問題・民族問題・宗教問題が深刻となり、そうした問題と関わって新たな世界秩序構築の模索が進んでいます。たとえば、国連大学は、「持続可能な開発」を研究テーマに掲げています。そうした課題の設定は、今日の大学の教育・研究において不可避です。ただ、大学はそうした課題を大学らしく余裕をもって客観的に見つめるということが必要でしょう。

そうした観点からみると、大学の学問研究のあり方は二つの点から変革が求められていると思われれます。一つは、大学自体の内部改革の必要です。すなわち、大学という制度は、もっとオープンなシステムへと脱皮しなければいけないということなのです。本来、大学は学問の自由を基礎にしたオープンなものであったと思います。日本の大学も、社会に開かれ、国際的に開かれた大学へと変革されるべき時が来ています。

二つめは、環境科学・平和学・人間工学などといった学際的・総合的な学問分野がどんどんできてきています。地球的な課題は学問のそのような総合化の進展を不可避としています。そうしたなかで、学際的・総合的な学問分野は、一つの大学のなかだけで創造・発展させることは困難です。もはや学問研究は一大学のなかでは完結しなくなっています。

す。こうした点から、大学間の連携や結合、大学連合の発想がでてきます。

三つめには、地域社会と大学の結びつきを強めること。さらにその結合のシステム自体をより本質的なものへと模索することが求められています。すなわち、行政と産業と大学という三者が共同して文化を創造することが求められてきています。いわば、「文化共創の時代」とでもいいましょうか、地域文化の創造に、その地域の重要な一員として大学が意識的に働きかけていくこと。これもまた、実は、愛知学長懇のめざしていることなのです。

たとえば、私どもの大学のことでも恐縮ですが、日本福祉大学では、「知多半島地域文化研究所」ということで、地域社会と大学が一体となって、知多半島文化のほりおこしと地域文化の創造に着手しています。

こうした試みを、愛知・東海地域全体に広めていこうと考えているわけです。実は、愛知地区の学長同士でも意見交流は出張の機会に東京ですというように、なぜか、愛知にいながら愛知では情報交換や意見交流の機会や場所がないことに気がつきました。これはおかしいということで、国公立の枠を超えてこの名古屋の場で情報を交換し、情報を発信する場所をつくらうということで愛知学長懇がで

きたのです。愛知という地域の文化創造・情報の発信ということも念頭にあるわけです。

### 地域文化創造の芽を

江原 そうですね、今、大沢先生がおっしゃったことを、やや理念的に敷衍化してつけ加えますと、大学は社会のなかの聖域になってしまっただけではないということです。そもそも大学といえども歴史的に誕生した歴史的な産物です。したがって、社会の変化にたがって流されるわけではなくけれど、社会と学問との本質的關係のなかで変わっていくことは当然のことです。さきほどのお話にもありました



えはら・あきよし：1927年岡山市生まれ。福山女学園大学学長、京都大学名誉教授。人類学、形態学、自然人類学、シモン・スタインの進化およびヒューマニゼーション（人間化）の問題に関心もつ。著書『猿人アウストラロピテクス』など多数。趣味はチェロ演奏。

ように、学問はますますグローバルなものになりそのパラダイムの転換も進んでいます。そうしたなかで学際化・総合化が進み、個々の学問はもはやその学問の領域や発想だけではたかひかなくなっています。二一世紀にはそうした傾向にますます拍車がかかるでしょう。われわれは大学教育に責任をもたなければなりません、それはまさしく二一世紀の人材として青年を育てることになります。そうしますとこうした歴史的な学問・科学のあり方の変容は無視するわけにはいきません。

次に、地域文化の問題ですが、私が専攻している人類学についていいますと、大変興味深いことに、中部地方は、実は化石人骨や遺跡の宝庫なのです。そういう意味では日本人類学発展に大いに寄与している地域です。しかしながら、それを調査・研究したのは東京の学者であり、関西の研究者でありました。それはどういうことでしょうか。決して中部地方に人類学の研究者がいないうわけではありませんが、学者や研究者のつながりは、伝統的にタテの系列が顕著で、東京の何々大学系とか京都のどの学派といったようなつながりが従来強かったといえます。したがって、名古屋・愛知・東海・中部といったようなヨコの地域のつながりは希薄でした。しかしながら、こうしたヨコの

つながりは学者間では貴重な役割を果たすことがあります。たとえば私は、「中部人類学談話会」という会に入っておりですが、そこでは系列的なタテのつながりではみられないような自由な発想で闊達な議論が行なわれ大変有益な刺激を受けています。従来、愛知や名古屋の土地柄は実利性が強く、目に見えない文化はいつも後回しになるとよくいわれています。しかし、私は、そうした傾向がデザイン博以降少しずつ変わってきたのではないかと思っています。それに、いつまでも地域性や風土のせいにはばかりにしておれませんか。

そうした話をするなかから愛知学長懇は自然にできあがったのです。愛知における文化を創造・発展させるべき大学が個々ばらばらでは地域の期待に応えられないであろう。まず会員相互の親睦と交流を図り、愛知の文化発展のエネルギーをほりおこす原動力・基盤の一つになろうと考えたのです。こうした場ができるとすぐにやるべきこともできてくるものです。

たとえば単位の互換制度や学年暦の見直し・セメスター制の導入など、大学同士が共同して進めないと意味がないことがいくつもあります。産業界からの大学への要望についても、大学側が共同で対処していくことが効果的です。

産業界からの要望は必ずしもそのまま引き受けるというわけにはいかないこともあります。産業界も実利性だけを求めるのではないけません。教員・学生・職員が一体となって、よりよい精神の形成と自立を追求することが大学の根本的使命です。これは大学として無視してはいけません。そうした立場から産業界や社会に発信していくのも大学の任務であり、共同して行なう必要のあることです。

### 大学教育の本質

大沢 そうした大学の使命を念頭においた場合、具体的に大学の教育はどのように変えて行くべきか、江原先生はどうお考えですか。

江原 それにつきましては、よくいわれることですが、大学は高校までの教育と違う側面があります。高校までの教育は何をどの程度まで学ぶかということが問題となります。しかし、大学ではそれをどのように学ぶのが重要となります。いいかえれば、知識習得型から自己開発型への転換です。

大学には本来そうしたシステムが備わっていました。たとえば、普通は大学以外の学校にはないものとしてゼミナールがありますね。これは教師と学生というタテ型の人間

関係ではなく、知識や経験の多寡は認めつつも、ともに学びあうヨコ型の人間関係を基礎にしています。幕末の私塾のように身分の差を超えたヨコ型の関係です。ヨコ型の人間関係ということでは、私は尊敬する今西錦二さんのことを思い浮かべます。今西さんは私たちにとって大変有能なリーダーではありません。しかしけっしてボスではありませんでした。日本の風土のなかではリーダーはともするとボス化する傾向があります。それはヨコ型の人間関係が弱いからです。タテ型の人間関係のなかでは新しい価値や学説を生み出すことはできません。一人一人のもつよいものを引き出すこともできません。今思うと、今西さんは塾をつくっていたともいえます。そして、今西さんは私たちと同列なのです。また、そんななかで、ともすると対立するような個性をもつそれぞれの研究者のよいところを最大限に引き出す結果となったと思います。英語でエデュケーション、ドイツ語でエアツイーウングというのはまさに各人のもつよいものを引き出すという意味です。

わが国では、明治維新以後は産業革命を経た欧米に追いつくことを、戦後は復興と高度成長のために、詰め込み型・注入型の教育が効を奏しました。しかしこれからはそんな時代ではありません。

こういう点から、大衆化してきている今日の大学教育を考えると、タテ型の関係のなかで知識を注入するのではなく、それまで学んできたことあるいは今学んでいることを各自が主体的に体系化する機会を与える場であるとしてもいいのではないのでしょうか。とくに複雑化し大きく変動している現代は、知識の量を問題にするのではなく、その知をどのように自分の力で主体的に体系化するということが必要ではないでしょうか。

大沢 今、江原先生がおっしゃったことは大学の本質は何かということにつながると思っています。そこで思い起こすのは、エリック・アシュビーの名著『科学革命と大学』です。アシュビーはその書物のなかで、社会的制度としての大学がなぜ長い歴史のなかで生き残ったのかについて論じています。そして、その秘密が、大学という制度が時代変化に柔軟に対応しつつもその本質を時代を超えて持続させてきた点にあるとしています。したがって、時代や社会の変化に応じて大学が変わることは必要ではありませんが、実利ではなく人類の精神性の部面の発展に寄与するという大学の本質は、それを失ったならば大学ではなくなるということになるでしょう。

一七・八世紀は、そうした大学危機の時代でした。この



頃ドイツやオーストリアでは国家に保護された大学が退廃を極めており、政府から大学監督官が派遣されていました。その報告書は悲鳴ともいえる現状告発でいっぱいですが、その報告書がその一部を要約しつつ引用してみましよう。やや煩雑ですがその一部を要約しつつ引用してみましよう。

「学生はならず者の集団と呼ばれ、怠惰な授業と過酷な試験で学習意欲をまったく喪失し、授業中でも酒を飲み、居眠りをし、雑談の限りをつくし、怠惰・喧噪・不作法・テロの展示場とさえいえる。大学は希望をもつ青年にとつて危険きわまりない場所となっている。大学教師も薄給と過重授業もくわわって自分の大学ではいいかげんな授業でお茶を濁し、学外ではアルバイト講義で金を稼ぎ、飲酒授業は日常茶飯事に行ない、教員選考にあたっては大学の自由を盾に、血縁・交友関係を軸にした身内仲間の門閥同族人事にあけくれている。」(笑)

まさに現代の日本の大学はこれに似た状況ではないかと

思いますが(笑)、一七・八世紀のヨーロッパでも、こうしたなかから、大学無用論と大学革新論が強まってきたのです。そこで、節度のある自由のなかで、アカデミズムを確立させることで革新を遂げたのが、フンボルト大学に代表されるドイツ型大学でした。一方、パリ大学などは最高学府の地位を高等師範学校やグランゼコールにゆずり、大幅な大衆化を果たすなかで、結果的にはむしろ啓蒙主義の新たな伝統を築いていきます。ご承知のように、ドイツ型大学は明治政府により日本の帝国大学の範とされました。そして長い間に、この型は大衆化した実情にみあわないリジッドな型となってしまいました。戦後改革の後ますます中途半端なものになっていきます。今こそ、教えることと学ぶことが双方の喜びとなる楽しい学習の集団を再建すべき時に来ています。それが、江原先生のいわれた自己開発を目的とするヨコ型の関係からなる大学教育のあり方ではないかと思うのです。

江原 大沢先生にはご専門の立場からわかりやすくまとめていただき、私もまた理解が深まりました。

大沢 つまり、社会や歴史の流れに柔軟に対応しながらも何を本質として堅持するかということでしょうね。

## 学問・科学の人間化

江原 その点では先ほどもいいましたように高度な専門的知識を得るだけでなく、それを体系化すること。いいかえれば、知識を体系化し自己の思想や教養として血肉化すること、いわゆるフィロゾフィーレンすることが大切です。

フィロソフィーは哲学という意味ですが、ドイツ語ではそんなたいそうな意味ではなく、一般教養といった意味でも使われます。大学を卒業するにあたって自分の認識を広い視野からもう一度まとめ出ていくということは大切なことです。そのためには、四年次にも一般教養を学習することも必要でしょうし、これまでの教養と専門という分け方は問題となるでしょう。

そのためには大学の入口と出口に目を向けることも必要です。先日、福井の教育委員会に講演に行きましたが、そこで高校側は大学入試に対して厳しい目でみていることを改めて知りました。入試制度を猫の眼のように変え、入試回数を増やし、入試科目を極端に削減することなどを各大学が実施していますが、そうしたなかで高校では、生徒へのきめの細かい指導や教育的な進路指導が困難になっているということです。ご承知のように、入試改革は、入学志願

者数の拡大をねらってどの大学でも行っていることです。

最近では学生の負担減を表向きの理由にして入試科目は減らされる傾向にあり、実質的な一科目入試も珍しくありません。そこで、うちの大学では、高校で物理をとらないで建築学科に入学してくる者や、化学をとらずに栄養学科に入ってくる学生がたくさんいて困っています。これは、経営優先のご都合主義が大学教育の内部で問題を拡大している事例ですが、今後は、いずれにしても高校までの既習知識と大学での専門のギャップは大きくなるでしょう。大学はとにかく学生を集めたいと考え、学生は何をどう学ぶかよりもとりあえず大学というところへ入りたいという、そんな状況が進展するなかで、専門的知識を教授するという大学のあり方も再考を余儀なくされています。





また、他方では、今の大学では法学なり経済学なりの一つの専門を教授することとたれりという状況ではなくなっています。法学を学んだ者が法律の仕事に就くとか、教育学部の学生がすべて教師になるとかいった状況ではなく、大学は一種の通過儀礼的機関となり、そこで学ぶ学問分野は学生にとって必ずしも必然的なものではなくなっているのです。そこで、大学が通過儀礼機関としての性格をもつならば、むしろどんな通過儀礼を課すのかということが重要になるでしょう。すなわち、大衆化という現状をふまえて大学の教育機関としてのあり方が本質的に考究されるべきでしょう。

その際、私の脳裏に浮かぶのは、ハイデルベルク大学六百年記念の場で「学生は学んだことを体系化して社会に出ていくようにせよ」と述べた哲学者ガダマーの言葉です。これは、産業社会のなかで専門的な知識の教授に安住していたドイツの大学への批判の言葉であったのです。最近では大学の出口（社会）の方も変わってきているのではないのでしょうか。

大沢 それはむしろ顕著ですね。たとえば、日本では開発研究の強化が叫ばれていた中曽根政権の頃、日本の電子産業・工業技術の発展に危機感をもったアメリカでは、むしろ

る基礎科学研究の充実が大きな課題とされました。しかもそれは自然科学にとどまりませんで、人文科学と自然科学そして社会科学を結合する文字どおりの基礎科学の発展がみられました。現在ではこうしたアメリカの科学技術政策が成果をあげ、再び日本に水をあげつつあります。ところで、日本では人文・社会科学のほとんどの部分と自然科学の基礎的部分は大学に負っています。そこでその研究という部分においても、依然として大学の社会的重要性があるわけです。

ところが、その科学や研究のあり方は、人類の地球的諸問題が深刻化するなかで今日急速に変化してきています。それを念頭において、二一世紀の社会における科学研究がどのように変化しているか予測してみますと、従来の人文・社会・自然といった研究分野の境界線は希薄になり、人文科学と自然科学を結合した人間に関するテーマが重要な研究対象となっていることでしょう。人間が個としてどう生き



るか。人類が類としてどう生き延びていくか。それらの研究は、哲学やヒューマニズムを基底にしたサイエンスによってしか追究できません。教養と専門の対立・ヒューマニズムとサイエンスの対立は止揚され、もはやそうした範疇は古い観念となることでしよう。そうした過程では、アカデミズムの確立と実利的テクニクスの教授を目的とした近年の大学から抜け落ちつつあった「教養」の新たな復権が不可避だと思われれます。それを見通してわれわれは大学づくりをしていかなければと考えています。

江原 まったく同感です。これからは人間の時代です。人類の時代です。では、そうした時代のなかで大沢先生は大学づくりのポイントをどうお考えですか。

大沢 私は、科学技術の変容という点からは、以下の九つのポイントが大学の研究と教育の再編成に関連するように思います。一、細分化した研究の統合。二、複合的・学際的研究の進展。三、国家的レベルでの巨大科学の批判的検討。四、研究と教育の国際化。五、高齢者・障害者など弱者の人権保障をめざす人間科学の確立。六、生涯学習への対応。七、情報の分析・吟味・判断・発信が主体的にできる人材の育成。八、都市問題など地域社会の問題解決のための研究の充実。九、政府の科学技術政策の民主的発展。

以上詳しく述べる時間はありませんが、要は、時代状況を見据えながらも大学がその本質を堅持して、主体的に研究の分野と性質を積極的に革新していくことだと思っております。しかし、すべての課題を一つの大学で充足させていくことはまずできないでしょう。できる大学はそれでよいと思いますが、できない大学は連帯・協力して充足させていくことが必要です。そこに大学の共同の重要性があります、私たちの学長懇談会もそうした重要性を認識していますし、京都の大学センター構想もそうした方向性をもつものと思っています。

#### 教養大学の意義

江原 パラダイムの転換ですね。その点について少しつけ加えてみますと、私たちは、一九世紀の延長線上に二〇世紀があり、二〇世紀の延長として二一世紀があると捉えがちですが、実はそうではないのではないのでしょうか。むしろ層のようになって時代が変わっていく。異質な時代に入っていくということなのではないのでしょうか。特に、これからの二一世紀の時代はそうではないかと思えます。科学、とりわけ自然科学はここ十数年の間にもものすごく変わってきています。従来から近年までは、デカルトからニュート

ンに至るまでのああいう発想形式でずっとやって来ました。しかし、二〇世紀になってからいわゆる量子力学に代表されるようなそうした発想形式にない科学が発達してきました。素粒子の世界などをつきつめていきますと今までの論理では説明できない現象にしばしば直面しますが、その結果まったく新たな論理形式がつくりあげられたのです。

よく考えてみるとそういう状況は、社会科学や人文科学にもあります。つまり、因果関係といえますか原因と結果といったような機械論的關係は、さまざまに批判されています。結果あるいは未来の予測といった点については、つねに予測不可能性がつきまとうのだといったことが強調されています。そうしたなかで、物理学の世界でも生物学の世界でも、そして経済学の世界でも学問の体系自体が大きく変化しようとしています。

そういうことになりましたと大学なども新しい視点に立つて教育と研究の方向を考えなければならぬわけです。この点はいま大沢先生が話されたことになりましたが、そこで、新しいパラダイムに立脚するどのような人材を育てるべきかが課題となります。私は、一言でいうと「二一世紀は人間の時代である」ということができるかと思えます。これはほとんど確実にそうなると思います。技術者や知識人

では尊敬の対象といえない。教養人でなければならぬ。これはギリシア時代からソクラテスなんか指摘していることですが、いま私たちも、人間の時代へのパラダイムの転換を前にして、この言葉をもう一度肝に銘じなければならぬと思います。大学で知識や技術を教えることは重要だけれど、それではたして十分かというところではない。そういう知識や技術を教養のレベルまで高めること。いかえれば青年たちを教養人として世におくりだすこと。あるいは教養人となる自己啓発力を与えてやること。これが大学の任務だといえましょう。

それから大学の理念・性格という点については、先ほど触れられましたドイツ型の大学ではアカデミズム、すなわち研究こそが大学の必須の機能のようにはわれませんが、大学はすべてが研究機関ではありません。今日ではそのことは明らかです。入ってきた学生はすべてが研究者になる



わけではありません。そうすると、どのように学生を教養人として育てていくか、すなわち研究から教育の面に視点を移して行かなくてはいけないと思うのです。そうするとどの大学も十分な研究組織が整っていないければいけないということにもならないのではないか、それは大学が連携と協力を強めて保障しあつていけばよいのではないか、こう考えるのです。また教養中心の大学があつてもよいし、そういう大学からさらに研究型大学へ進んでいく学生があつてもよいのではないかと考えるのです。そうすれば、むしろ十分な教養をもった知識人が研究者として育つていくことになり、研究の土壌もまた豊かになります。一つ一つの大学がすべて研究機関になる必要はないのです。

### 学生の立場に立った大学改革

江原 ところが、そのためには大学の教員の意識が変わらなければなりません。大学の教員の多くは自己を研究者と考へてはいますが、教育者としての自覚の程度は低いといわざるをえません。また優れた研究者がかならず優れた教育者であるわけではありませんが、採用と昇進は研究業績中心で評価されます。そうしたなかで、研究者の方が教育者より上位にあるかのような意識をもっています。したが

つて、授業改革には不熱心で、研究を優先し学生の教育を二の次にする傾向があります。先生方には一般的に不評ですが、私はよくうちの大学の先生方に、うちは研究大学でなく教養大学なのだから、研究だけやっていけばよいというのでは困りますと聞いています。大学教員の意識の変革も必要でしょうね。

大沢 ほんとにその通りです。どうすれば意識変革ができるのでしょうか。

江原 大学教員は教え方をトレーニングされていません。大学院の教育においても研究者としての自立のための教育が中心です。教師の考え方や知識を講義するだけでは学生はついてきません。あくびと雑談と居眠りを招くだけです。どういうことをどういうふうに教えたからより効果的か研究する必要があります。工夫する心掛けだけでもかなり変わるのではないのでしょうか。

大学における教育の重要性という点では、実は私はこういう思い出があります。私はかつてドイツの大学で教鞭をとったことがあります。年間の講義のなかで一度だけ地質学会で講演を頼まれて休講にしようとしたことがあります。私は、これは当然許されるだろうと思っていました。しかしながら、すぐに助手の人がとんできて講義を休講に

するのは困る。大学教師は講義が何にも優先する義務だというのです。この時私は勉強しましたね。またそれに関連してもうひとつドイツの大学で知ったことは、教師たちが講義中に自分の講義の予告や宣伝をするなど学生サービスに熱心なことです。また、講義もだたら続けるのではなく、一回毎にテーマを明確にして学生を集中させるなど、よく考えていると思いました。

大沢 毎号読み切りの連載小説ですな。(笑)

江原 『眠り狂四郎』ですよ。(笑) 一回ずつの読み切りではあるが全体はまた大きな物語となっている。

大沢 なるほど、今の学生には意外に重要なことかもしれないですね。

江原 私たちの学生の時は、わからなければ学生のせいだといって突き放すやり方でしたがね。自分で悟れということも重要かもしれませんが、もっと教授方法を合理的・科学的にするよう検討されるべきです。

大沢 教育方法・教授方法といった学問分野はあり、それを大学教員が研究をしています、みずからの大学の教育実践を研究対象にすることは、わが国ではほとんどありませんね。アメリカでは近年盛んで、その翻訳もあります。

江原 これまで大学の教員が研究を隠れ蓑といつては何で

すが、それを理由にしながら大学教育実践についてはなおざりにしてきたといえましょうか。教育というものは手間も時間もかかり成果もはつきりしない。それですから手を抜く傾向がありはしないでしょうか。

大沢 そういうことでしょね。しかしそれを続けると大学教員は自己のレーゾン・デートルも失いかねないのですよ。なぜなら学生が来なくなれば大学自体存続しないのですから。

江原 その点をシステムの問題として、いいかえれば大学づくりということであろうと、受け手である学生の立場に立った大学改革という視点が大切なのです。学生のニーズも多様になりますし、教養人として育てるということになりますと、大学は総合的な教育力をもつ必要があります。しかし、普通の大学ではそうした必要なものすべてを備えることができませぬ。そこで、各大学が相互に助け合い補充しあうということも重要になってきます。単位の累積加算を基礎とした単位互換制度はそうした観点から実施するものといえます。

大沢 そうした単位の制度が進展すると市民の生涯学習の面からも便利ですよ。一生をかけて大学を卒業する。青年期・壮年期・高齢期それぞれに教養や学問に対する見方や

考え方も違ってくるでしょうね。さまざまな考え方が渦巻くなかで新しい学問と文化を生み出す大学。生涯学習センターとしての大学のイメージは豊かに膨らみますね。そういう視点からも、愛知・東海の大学が連携を深めてよいものを共有していくことは本当に重要です。

**江原** 国籍や年齢にかかわらず大学に何かを求める者たちを視座におくことこそ、何より現代の大学の改革のポリシーです。(一九九四年八月二十九日、椋山女学園大学学長室にて)

記録・構成 三羽光彦

写真 秋野勝紀

